

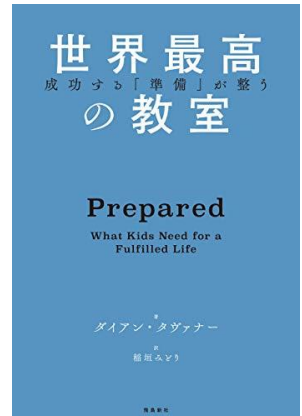
# ～TANKYU～

谷地南部小学校  
校内研究だより  
2023. 1. 18  
No.52 文責 五十嵐

## 「本当はこうしたいのに…」を叶える

非常勤講師をして6年目の五十嵐です（1年だけ常勤やりましたが）。様々な教育現場に携わってまだ5年10か月ですが、自分のやりたい教育とやるべき教育にギャップがあるなど思うことが多々あります。そして、そのギャップを埋めるために動くことも出来ていません。立場の問題もありますが、1人の教師が考えたところですぐには変わらないし…。なんて、この考えが良くないと思わせてくれたのは、この本です。

『成功する「準備」が整う 世界最高の教室』（著者：ダイアン・タヴァナー 訳：板垣みどり）とあるきっかけから出合ったこの本ですが、実は教育本を読むのはこれが初めてです。実績のある先生方の講義もそうですが、教育本って「そんなのただの理想じゃん。」「これは優秀な子たちの話でしょ？」なんてイメージがあって、手に取ることすらありませんでした。でも、この本は違いました。というか、教育本って私が思っているものとは違うのかもしれませんが。この本を読み進める度に、「それな。」と思いました。「それな。」ってただの同意じゃないですよ？イメージとしては、ちょっと微笑み、何度も頷きながら講義を聞いているあの感じです。伝わりますかね？簡単に言えば、めっちゃくちゃ深い同意です。何を言いたいのか、それは、この本の著者であるタヴァナー先生の話す教育観が、私が常に思っていた「本当はこうしたいのに…」ばかりだったということです。



皆さんは、「本当はこうしたいのに…」って思うことありませんか？私は、5年生の社会の授業を担当していて、教科書の使い方に迷っていました。そして、「社会の教科書って学び方を学ぶ参考書として使えばいいのでは？」という考えにたどり着きました。教科書の内容を読んで子ども自身が疑問に思ったことや興味を持ったところをどんどん探求し、その学び方は、教科書を参考にします。という流れで単元計画を立ててみました。でも、教科書を参考にするとはいえ、あまり教科書を使わないのは子どもたちや保護者の皆さんは不安に感じるかもしれません。私は、子どもたちのためのより良い学びと、その子どもたちの学びへの不安との間で、「これは本当に最適な学び方なのか…？」と、葛藤していました。

裏面に続きます

タヴァナー先生は、PBL（=Project Based Learning 問題解決型学習）を採用しています。PBLとは、「子どもたちが長い時間をかけて興味深い複雑な問いや問題、困難に取り組むことで、知識や技術を身につける指導法」です。これは、私の「本当はこうしたいのに…」に寄り添ってくれる指導法でした。本の中でタヴァナー先生は、教科書は問題解決型ではないと言ったうえで、このように書いています。

教科書的なアプローチはシンプルで標準的かもしれないが、子どもたちに深く考えること、学びの内容を自分と関連付けること、問題を解決することを求めない。「議案がどうやって法律になるのか」を暗記しても、「関連づけのない情報」として、テストが終わったら子どもたちの記憶から消えてしまう可能性が高いだろう。

一方で、違う方法を試すことは不確実性を伴う。PBLにとっては、標準テストが高い障壁となる。（中略）標準テストの目的は「どれくらい準備ができていて、結果を出せるか」を測ることなのにもかかわらず、こうしたテスト自体が準備の妨げになりかねないことに私は皮肉を感じる。さらに皮肉なのは、PBLで学んだ子どもたちの標準テストでの成績が優秀なことだ。

「テストが終わったら子どもたちの記憶から消えてしまう。」私にとってまさに「それな。」でした。私の中の「本当はこうしたい。」をタヴァナー先生は実行していました。だからと言って「もう教科書使いませーん。」ではないことは私でも分かります。やり方って様々あって、子どもに合わせるって間違いじゃないんだなと、感じました。

こういう「本当はこうしたいのに…」を叶えてくれるのがこの本です。まだまだ紹介したいところはたくさんありますが、長くなってしまったのでこの辺で終わります。気になった方は、五十嵐に声かけていただければいつでも貸します。そのために電子書籍で買った上に本も買ったので。